

くす通信

第242号
2021年4月1日

国立病院機構熊本医療センター 発行

小児科より

川崎病について

臨床検査技師より

川崎病の検査について



4月

「くす(樟)」の由来について

くす(樟)は常緑の広葉樹で、熊本城内に多く見られます。種々の精油成分を含み、良い香りがします。樟脳をはじめ色々な薬用成分が抽出されるなど有用な薬用樹でもあります。

また、くすし(薬師)とは、医師のことを指し、くすしぶみ(薬師書)は医術に関する書物のことを言います。

本誌はこの「くす」にあやかり、健康な生活を送るために情報を提供しております。お気軽にお読み下さい。

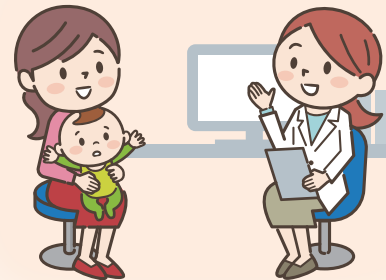
超音波検査は超音波診断装置を使用し、人の耳では聴こえない音(超音波)をプローブと呼ばれる機器から体内に発信し、その音の跳ね返りを画像化することで評価します。妊婦さんや胎児にも用いることができる安全な検査方法の一つです。当院では専門医の指導の下、超音波検査に関する認定資格を有する臨床検査技師が検査を行っています。



超音波診断装置

検査は、通常仰向けに寝ていただき、機器を身体にあてて観察します。しかしながら、患者さまの多くは乳幼児であるため、保護者の協力を得ながら座位や抱っこした状態で検査をすることもあります。月齢や年齢で冠動脈の拡大を判断する基準は異なりますが、前回の検査と比較しながら観察しています。

検査は、通常仰向けに寝ていただき、機器を身体にあてて観察します。しかしながら、患者さまの多くは乳幼児であるため、保護者の協力を得ながら座位や抱っこした状態で検査をすることもあります。月齢や年齢で冠動脈の拡大を判断する基準は異なりますが、前回の検査と比較しながら観察しています。



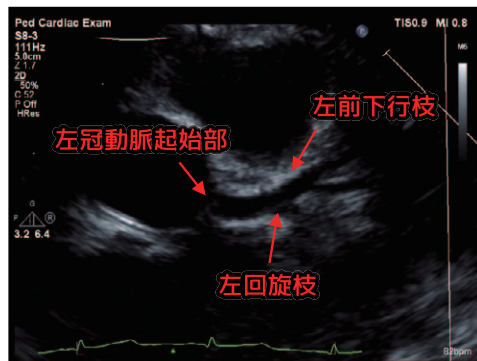
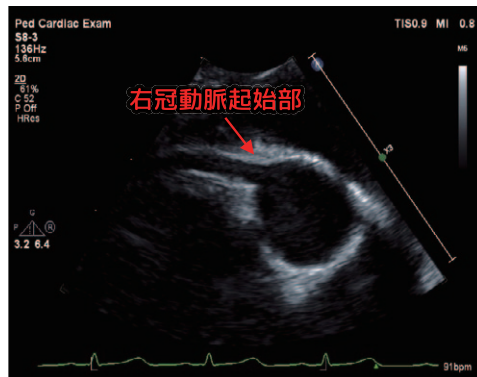
臨床検査技師から説明!

川崎病の検査について



臨床検査科
主任臨床検査技師
(細菌血清主任)
佐々木 智子
ささき ともこ

川崎病の重要な合併症である、冠動脈瘤の出現がないかどうかの確認をするために行うのが心臓超音波検査です。通常の心機能評価と併せて、冠動脈の大きさや冠動脈瘤がないかどうか、炎症を示唆する所見がないかどうかを観察します。冠動脈は、心臓の中にある大動脈から分かれて、心臓の周りを囲むように走っています。心臓超音波検査ですべてを観察することはできませんが、冠動脈瘤ができる危険性が高い根元の冠動脈を主に評価しています。



川崎病について

小児科医師

よしだ たかのぶ
吉田 敬伸



■ 川崎病とは

川崎病は乳幼児期に多い病気で全身の血管に炎症が起こります。1967年にこの病気を発見した川崎富作先生の名前にちなんで川崎病と名付けられました。近年は増加傾向と言われており、年間に約 15000人のお子さんが川崎病を発症すると言われていています。現在のところ川崎病の原因はまだはっきりとは分かっていません。

■ 川崎病の症状

川崎病の主な症状として発熱、目の充血、唇や舌の赤みが強くなる、首のリンパ節が腫れる、発疹、手足のむくみなどがあります。これら 6 つの症状のうち、5 つ以上を認めると川崎病の診断となります。また、それ以外の症状として BCG を接種した部位が赤くなるのも川崎病に特徴的な変化とされています。血液検査では炎症反応や肝酵素の上昇、黄疸、アルブミンの低下などを認めます。川崎病の症状がそろうまでには数日かかることが多いので、初期には診断がつかないこともよくあります。これらの症状がそろってくる場合は病院で診察を受けてください。また、川崎病の重要な合併症として冠動脈瘤があります。冠動脈は心臓に栄養を送る血管で、冠動脈にこぶ（瘤）ができると心筋梗塞などの原因となることがあります。冠動脈瘤は川崎病の発症から 10日ほどたってから出現することが多いとされています。

■ 川崎病の治療

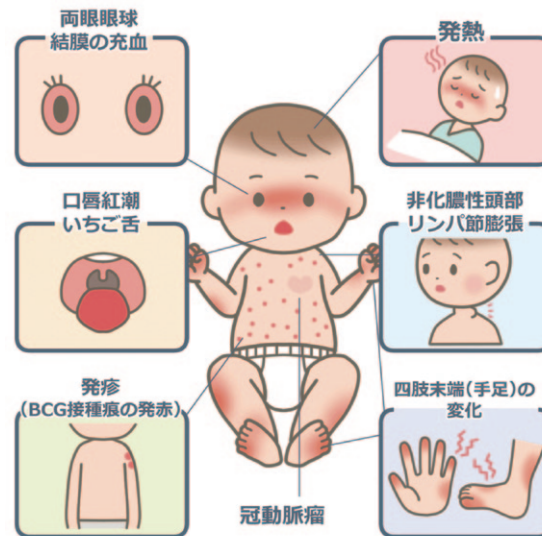
川崎病の治療の一番の目的は冠動脈瘤の予防です。川崎病と診断がついたら冠動脈瘤ができる前に早期に

治療を開始します。治療には一般に免疫グロブリン製剤という点滴の治療薬とアスピリンという内服薬を使用します。免疫グロブリンは血液中の成分で、免疫で重要な役割を担うタンパク質です。全身の炎症をおさえて冠動脈瘤ができるのを防ぎます。アスピリンには血管の炎症を抑える効果と血液を固まりにくくし血栓を予防する効果があります。

■ 退院後の注意点

冠動脈瘤を認めなかった場合は引き続き外来で定期的に心臓の超音波検査を行い、その後も冠動脈瘤の出現がないことを定期的に確認します。アスピリンは発症後 2～3ヶ月ほど内服し経過がよければ以降の内服は終了となります。冠動脈瘤を認めない場合は日常生活や運動の制限は特にありません。ワクチン接種は免疫グロブリン製剤の使用から間隔を空けた方がよい場合がありますので、病院で確認してください。冠動脈瘤を認めた場合は専門的なフォローが必要ですので主治医にご相談ください。

川崎病の主な症状



小児科の紹介

当科では感染症など小児の一般的な疾患に加えて、アレルギー、免疫疾患の診療にも力を入れています。近年増加している食物アレルギーに対しては食物経口負荷試験を行って評価し、必要最小限の除去を基本とした食物摂取指導を行っています。また、必要に応じてスキンケアなどの生活指導にあたっています。難治性の小児喘息に対しては、生物学的製剤による治療も積極的に行っています。免疫疾患では免疫不全症（感染症が反復・難治化）、周期性発熱、不明熱、膠原病などの診療を行っています。小児の救急疾患（けいれん、急性熱性疾患、事故など）についても常時受け付けており、入院診療も行っております。

国立病院機構熊本医療センター

- 診察日 月曜日～金曜日
 - 休診日 土・日曜日及び祝日
年末年始（12月29日～翌年1月3日）
 - 受付時間 8:15～11:00
- 〒860-0008 熊本市中央区二の丸 1-5
TEL 096(353)6501 (代表)
FAX 096(325)2519
H P <https://kumamoto.hosp.go.jp/>

※ 形成外科のみ受付は、水曜日以外の13:30～16:30となります。

※ 一部の科では、午後に予約診療を行っていますが、新患、予約のない方の午後診療は行っておりません。急患はいつでも受診できます。